

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和 8 年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第 7 号（10 月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosho/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

- | | |
|--------------|---|
| 1. 使用する人の安全 | 使用者自身の健康管理、安全使用 |
| 2. 作物に対する安全 | 適期、適正防除で薬害防止 |
| 3. 農産物に対する安全 | 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守) |
| 4. 環境に対する安全 | 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川、湖沼、海等への汚染防止)
(養蚕、養蜂等への危被害防止) |
| 5. 保管管理の安全 | 保管管理の徹底で事故防止 |

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

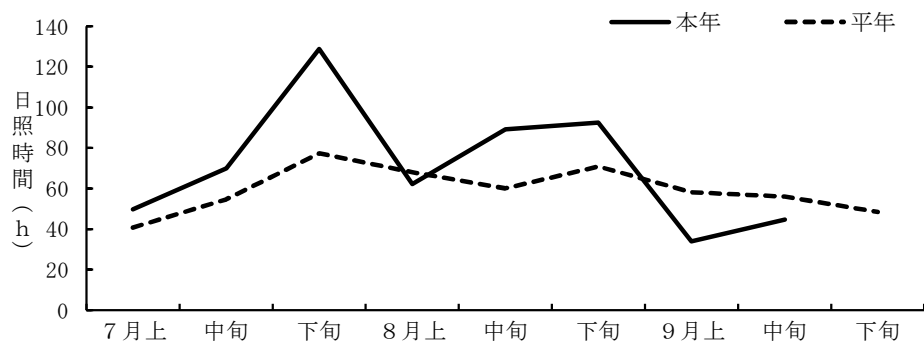
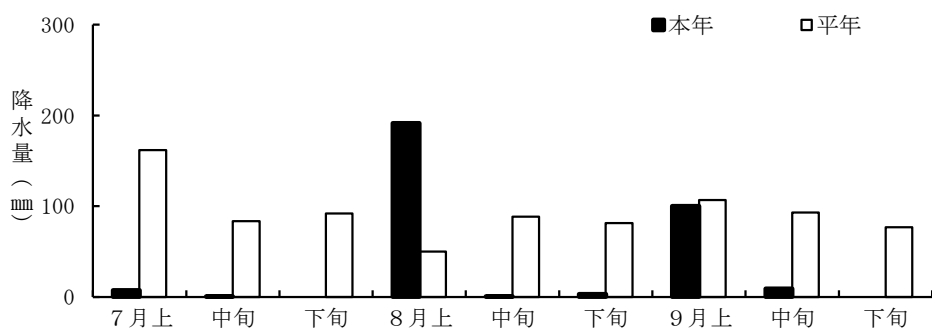
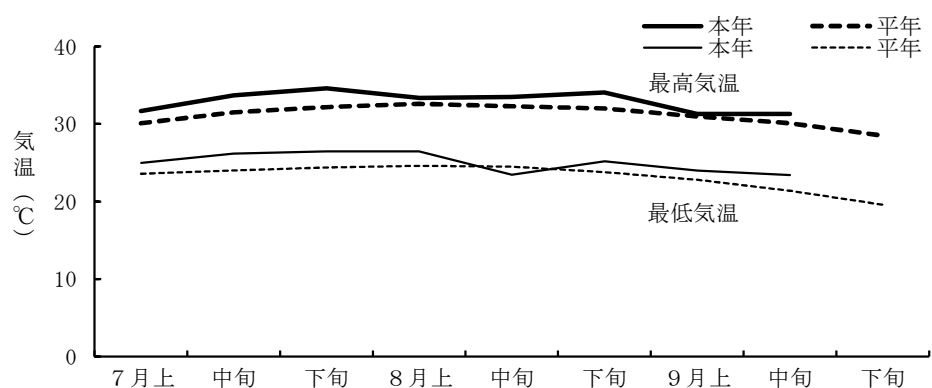
令和8年度 病虫害発生予報 第7号

令和8年9月30日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（9月26日～10月25日） 令和8年9月24日 鹿児島地方气象台発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平 年 並	高い(多い)	
気 温	九 州 南 部	1 0	3 0	6 0	九州南部、奄美地方ともに 気温は高く、降水量は平年 並みか少なく、日照時間は 平年並みか多い見込み。
	奄 美 地 方	1 0	2 0	7 0	
降 水 量	九 州 南 部	4 0	4 0	2 0	
	奄 美 地 方	4 0	4 0	2 0	
日照時間	九 州 南 部	2 0	4 0	4 0	
	奄 美 地 方	2 0	4 0	4 0	



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
野 菜	根深ネギ	黒斑病	やや多	やや多
		ネギハモグリバエ	やや多	多
		アザミウマ類	やや多	多
野 菜 共 通	根深ネギ、キャベツ、 ダイコン等	ハスモンヨトウ	やや多	やや多
		シロイチモジヨトウ	やや多	やや多
花 き	キク（施設）	ハダニ類（県本土：施設）	並	やや多
		アザミウマ類（県本土：施設）	多	多
果 樹	カンキツ	かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	多	多
		黒点病（県本土・熊毛地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	多	多
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		サビダニ類（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		果樹カメムシ類	並	並
茶 樹	チャ	カンザワハダニ	多	多

【病害虫発生予報】

I. 普通作物

防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ

(1) サツマイモ基腐病

発生が見られたほ場では、次年度の発病リスクを軽減するために、収穫後に以下の防除対策を徹底する。

<本ほ>（収穫後の残さ対策）

ア 屑イモや諸梗は次期作の伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処分する。

イ 僅かに残った残さの分解を促進するため、収穫直後に速やかに残さの細断やすき込みを行う。
また、土壌が乾燥している場合は、灌水を行ってから耕耘する。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、以下を参照してください。

鹿児島県

サツマイモ基腐病防除対策マニュアル（第4版）令和6年3月改訂

(https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20240315133011-1.pdf)



農研機構

サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和4年度版）

(https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf)



農研機構

「本圃におけるサツマイモ基腐病発病リスク低減技術」マニュアル（令和7年3月）

(https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/168484.html)



Ⅱ. 野菜

1. 根深ネギ

(1) 黒斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量 やや多

発生ほ場率 83%

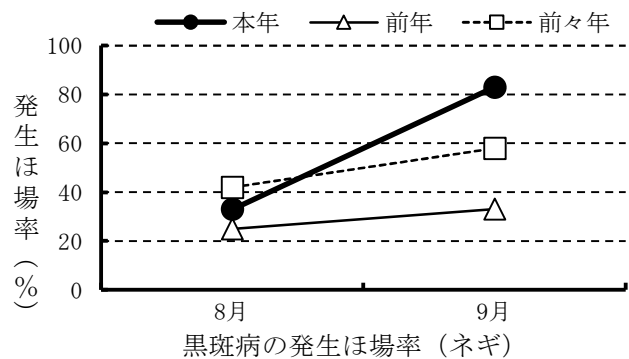
(平年：-%、前年：33%)：やや高い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 肥料切れや生育後期の草勢が衰えると発生しやすいので、適正な肥培管理を行う。

(イ) 降雨が多い場合や滞水により発病が助長されるため、排水対策を行う。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(2) ネギハモグリバエ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量 やや多

発生ほ場率 67%

(平年：-%、前年：58%)：並

発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

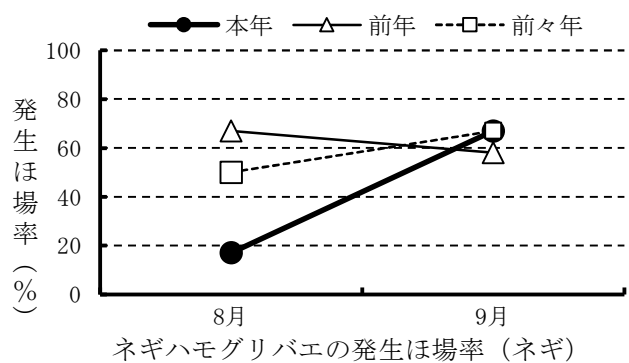
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 高温乾燥により、一部のほ場で甚発生を認めている。B系統は多数の白色食害痕を生じるため、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(ウ) 本県で発生しているネギハモグリバエのバイオタイプは、B系統が主体である。防除体系については、令和7年度普及情報（右二次元コード）を参照する。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

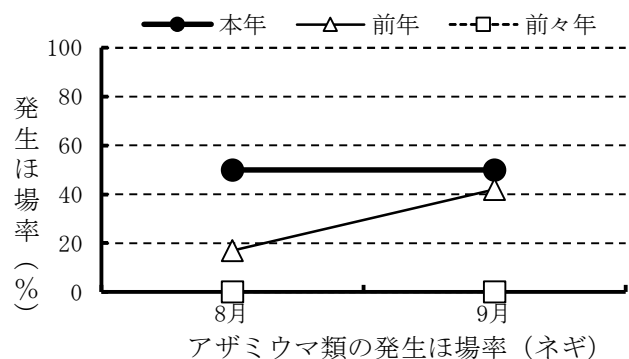
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 50%

(平年：-%、前年：42%)：並

発生程度の高いほ場を認めた (+)



(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

（ア）白いかすり状の被害痕の被害を確認し、早期発見と早期防除に努める。

（イ）作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

（ウ）ほ場内及びその周辺の除草に努める。

2. 野菜共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

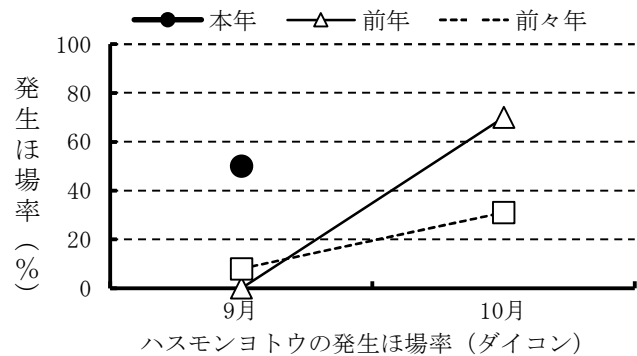
（ア）発生地域 県本土

（イ）対象作物 根深ネギ、キャベツ、ダイコン等

（ウ）発生量 やや多

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや多



作物名	発生ほ場率 (%)		概評
	本年	平年	
根深ネギ	8	-	(並※)
キャベツ	25	21	やや多
ダイコン	50	-	(やや多※)

※深ネギは令和6年度、ダイコンは令和5年度からの調査のため、前年比による概評を記載

発生程度の高いほ場を認めた（＋）（キャベツ、ダイコン）

8～9月のフェロモントラップ総誘殺数：並

	南さつま市	鹿屋市
発生量	並	並
誘殺数（8月6半旬～9月5半旬）	13,243頭（平年14,004頭）	13,207頭（前年15,007頭）

※鹿屋市は2024年から調査地点を変更したため、前年比による概評を記載

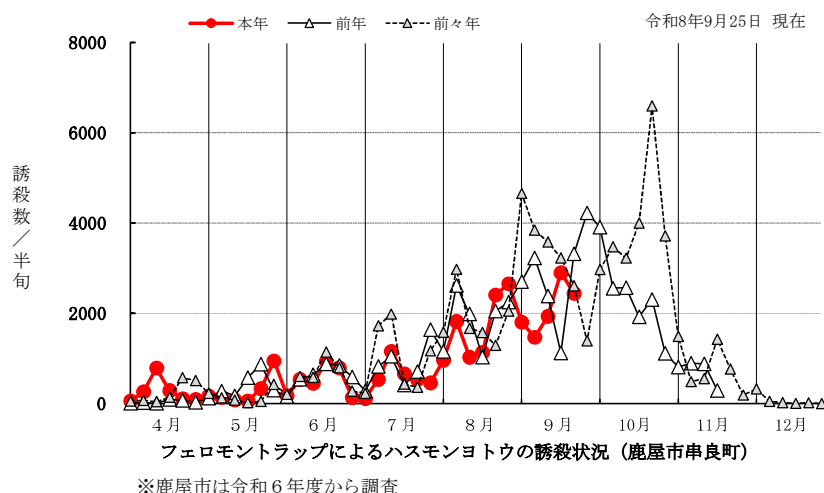
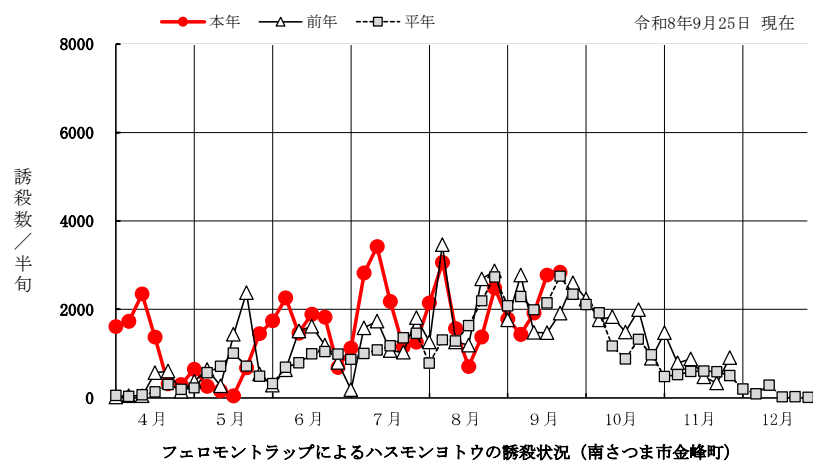
ウ 防除上注意すべき事項

（ア）若齢幼虫は集団で表皮を残して被害し、白変葉を生じるので、ほ場を見回り早期発見に努める。

（イ）卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。

（ウ）中・老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。

（エ）ジアミド系農薬に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



(2) シロイチモジヨトウ

ア 予報内容

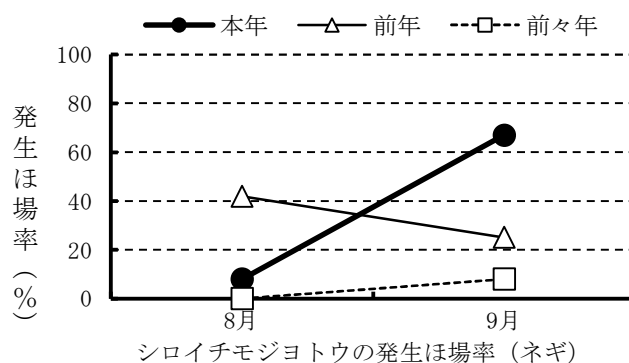
- (ア) 発生地域 県本土
(イ) 対象作物 根深ネギ、キャベツ等
(ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多

作物名	発生ほ場率 (%)		概評
	本年	平年	
根深ネギ	67	-	(やや多※)
キャベツ	8	1	やや多

※根深ネギは令和6年度からの調査のため、前年比による概評を記載



発生程度の高いほ場を認めた (+) (根深ネギ)

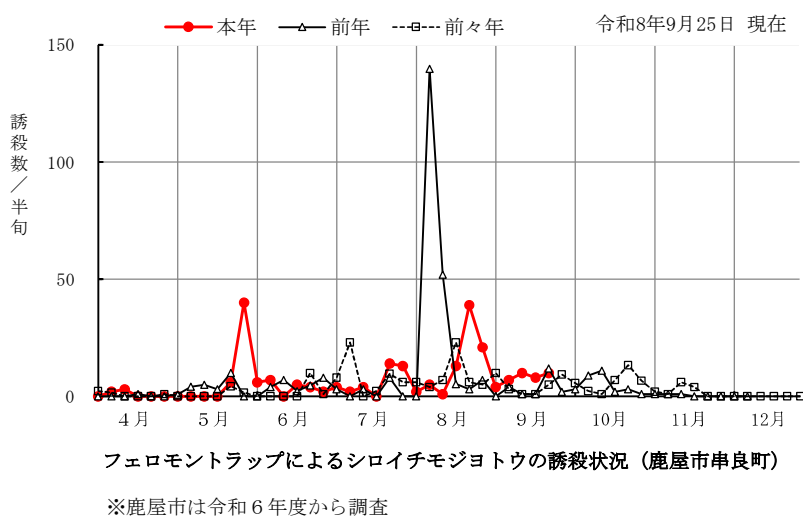
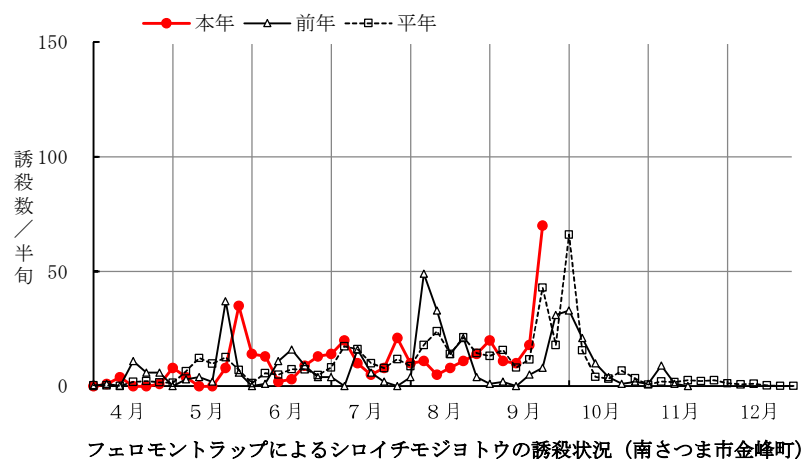
8～9月のフェロモントラップ総誘殺数：多～並

	南さつま市	鹿屋市
発生量	並	(多※)
誘殺数 (8月6半旬～9月5半旬)	143頭 (平年106頭)	60頭 (前年25頭)

※鹿屋市は2024年から調査地点を変更したため、前年比による概評を記載

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害するので、発生を目安にする。
- (イ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (ウ) 中・老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。
- (エ) 一部のジアミド系農薬（クロラントラニリプロール、フルベンジアミド）に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



防除に関する今月の留意事項

1. トマト黄化葉巻病（TYLCV）、キュウリ／メロン退緑黄化病（CCYV）、
キュウリ／メロン黄化えそ病（MYSV）

トマト黄化葉巻病やキュウリ／メロン退緑黄化病はタバココナジラミによって、キュウリ／メロン黄化えそ病はミナミキイロアザミウマにより病原ウイルスが媒介される。今後も気温が高いと予想され、害虫の発生が多くなることが危惧される。そのため、タバココナジラミやアザミウマ類の育苗期から定植初期の総合的な対策を徹底する。

- (1) ハウス内及びその周辺の雑草は、媒介虫の生息・増殖場所になるので定植 10 日前までに除草する。
- (2) 育苗での発生を見落とさないように注意し、防除を徹底する。

- (3) 成虫の侵入を抑制するために紫外線カットフィルム等を利用する。ただし、ミツバチなどの訪花昆虫を使用する場合は、活動が妨げられるので利用しない。
- (4) ハウス内への侵入を防ぐため、開口部（サイド等）には目合いが 0.4mm 以下の防虫ネットを設置する。なお、気温の高い時期はハウスに寒冷紗を張る等、昇温抑制対策を可能な限り行う。
- (5) 防虫ネットの設置のみでは侵入を完全に防ぐことができないので、定植時には必ず粒剤を施用する。
- (6) タバココナジラミは黄色粘着トラップを、アザミウマ類は青色粘着トラップを設置し、早期発見・初期防除に努める。
- (7) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

2 トマトのトマトキバガ

本年5～6月にかけて、トマト、ミニトマトの複数の産地においてトマトキバガによる果実被害が本県で初確認された。今後も気温が高いと予想されており、野外のトマトキバガ成虫が多くなることが危惧される。ハウス内への侵入を防ぐため、以下の点に注意し、侵入防止や早期発見・早期防除に努める。

- (1) 施設栽培ではハウスの開口部や換気部を目合い 1 mm 以下のネットで被覆し、ハウス内への侵入防止に努める。
- (2) ハウス内外の雑草等を除去する。
- (3) ほ場内をよく見回り、疑わしい被害葉、被害果実を発見した場合、ビニル袋等に密封するなど、成幼虫を死滅させたいうで、適切に処分する。ハモグリバエの食害痕は細長く、線状になるのに対して、トマトキバガの食害痕は面状である。
- (4) 幼虫の発生を確認したら、トマト、ミニトマトでは本種に登録のある農薬（令和8年度技術情報第6号、5月15日付け：右二次元コード）を参照のうえ、使用基準を遵守し、防除する。



Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 30%（平成 32%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

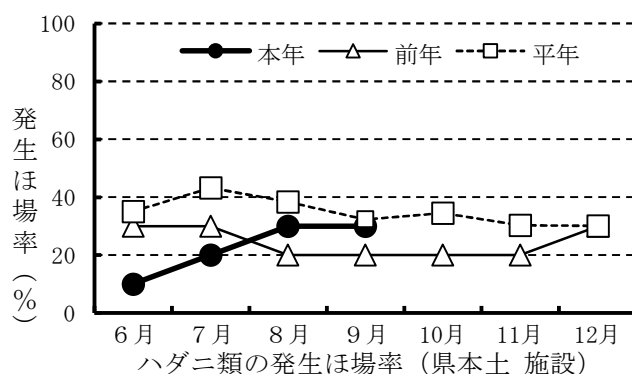
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する場合がありますので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよく付着するように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 40%（平成 30%）

：やや高い

発生程度の高いほ場を認めた（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類（クロゲハナアザミウマを

除く）の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

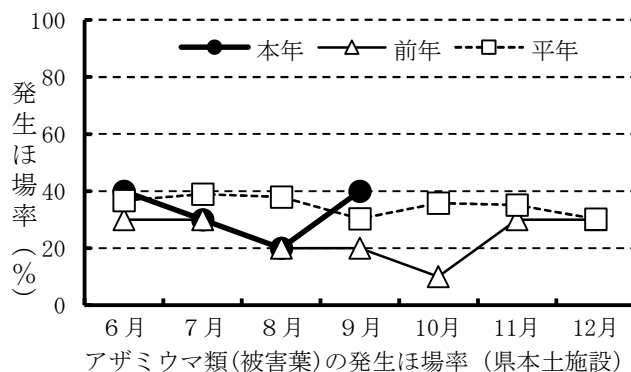
(イ) クロゲハナアザミウマは、主に中下位葉に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏まで付着するように丁寧に散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(カ) 母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域（果実） 並

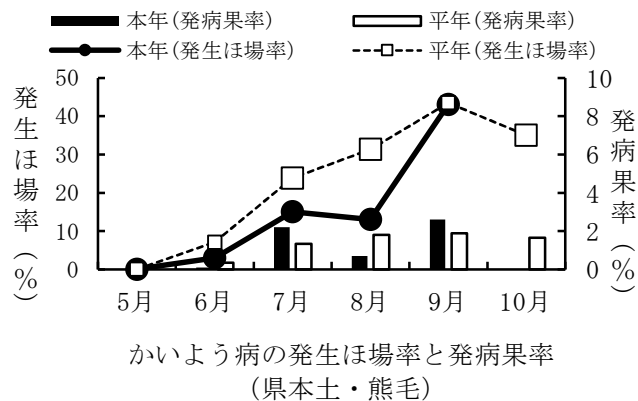
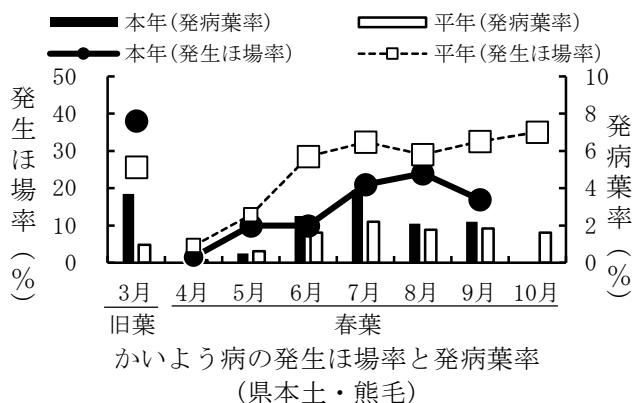
奄美地域（果実） 多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発生量	やや少	並
発生ほ場率	16%（平年 33%）：低い	43%（平年 43%）：並
発病率	1.6%（平年 1.8%）：並	2.2%（平年 1.9%）：並
	発生程度の高いほ場を認めた（+）	



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発生量	並	多
発生ほ場率	14%（平年 11%）：並	43%（平年 13%）：高い
発病率	0.1%（平年 0.1%）：並	0.4%（平年 0.2%）：やや高い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染前の防除効果が高いので、強風雨等の襲来前には、予防散布に努める。

(イ) 強風雨等により葉や果実に生じた傷口から感染するので、防風ネットの設置や防風樹の管理に努める。

(ウ) 罹病した夏秋梢やミカンハモグリガの食害を受けた夏秋梢はせん除し、伝染力の強い越冬病斑を少なくする。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全地域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 64% (平年 53%) : やや高い

発病果率 6.8% (平年 7.7%) : 並

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

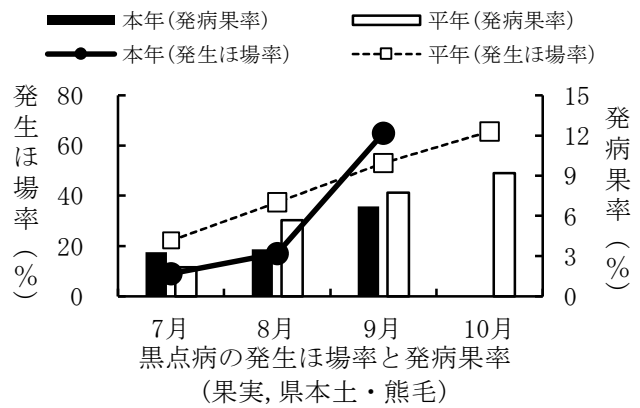
発生ほ場率 0% (平年 9%) : やや低い

発病果率 0% (平年 0.3%) : やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤防除は累積降水量 200~250mm を目安とするが、近年、数日でこの雨量を超える場合が多い。薬剤散布間隔は気象情報に留意し、簡易雨量計等の園内設置により防除の目安とする。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量：多

発生ほ場率 45% (平年 22%) : 高い

寄生葉率 13.2% (平年 2.4%) : 高い

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量：やや少

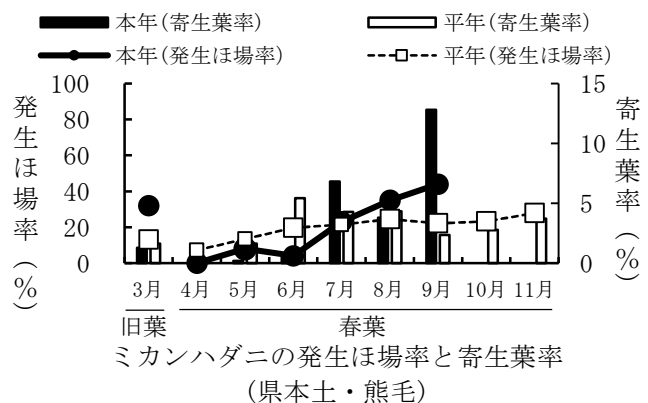
発生ほ場率 0% (平年 16%) : やや低い

寄生葉率 0% (平年 0.5%) : やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数 0.5~1.0頭 (寄生葉率で 30~40%) を目安に防除する。

(イ) 薬剤抵抗性を生じさせないため、同一系統、同一殺ダニ剤の使用は年1回とする。



(4) サビダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量 : 並

発生ほ場率 4 % (平年 5 %) : 並

寄生果率 1.1 % (平年 0.2 %) : 高い

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : 並

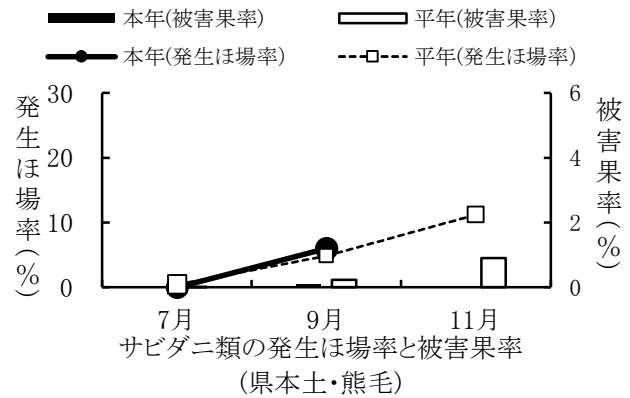
発生ほ場率 0 % (平年 3 %) : 並

寄生果率 0 % (平年 0.1 %) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 昨年多発したほ場では、発生する場合が多いので、防除に努める。

(イ) 秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。



(5) 果樹カメムシ類 (ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシ)

(令和8年度注意報第5号、8月28日付け参照)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量 : 並

発生ほ場率 4 % (平年 5 %) : 並

(イ) 予察灯におけるカメムシ類の誘殺虫数は、9月に入って全地域で減少した(図1)。

(ウ) ヒノキ球果の最大口針鞘数は、9月前期に全地域で25本/果を超えており、ヒノキから離脱している可能性がある(表1)。

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 果実が吸汁被害を受けると落果や果実品質の低下を招くため、こまめに園内外を見回り飛来を認めたら直ちに防除する。



ツヤアオカメムシ

チャバネアオカメムシ

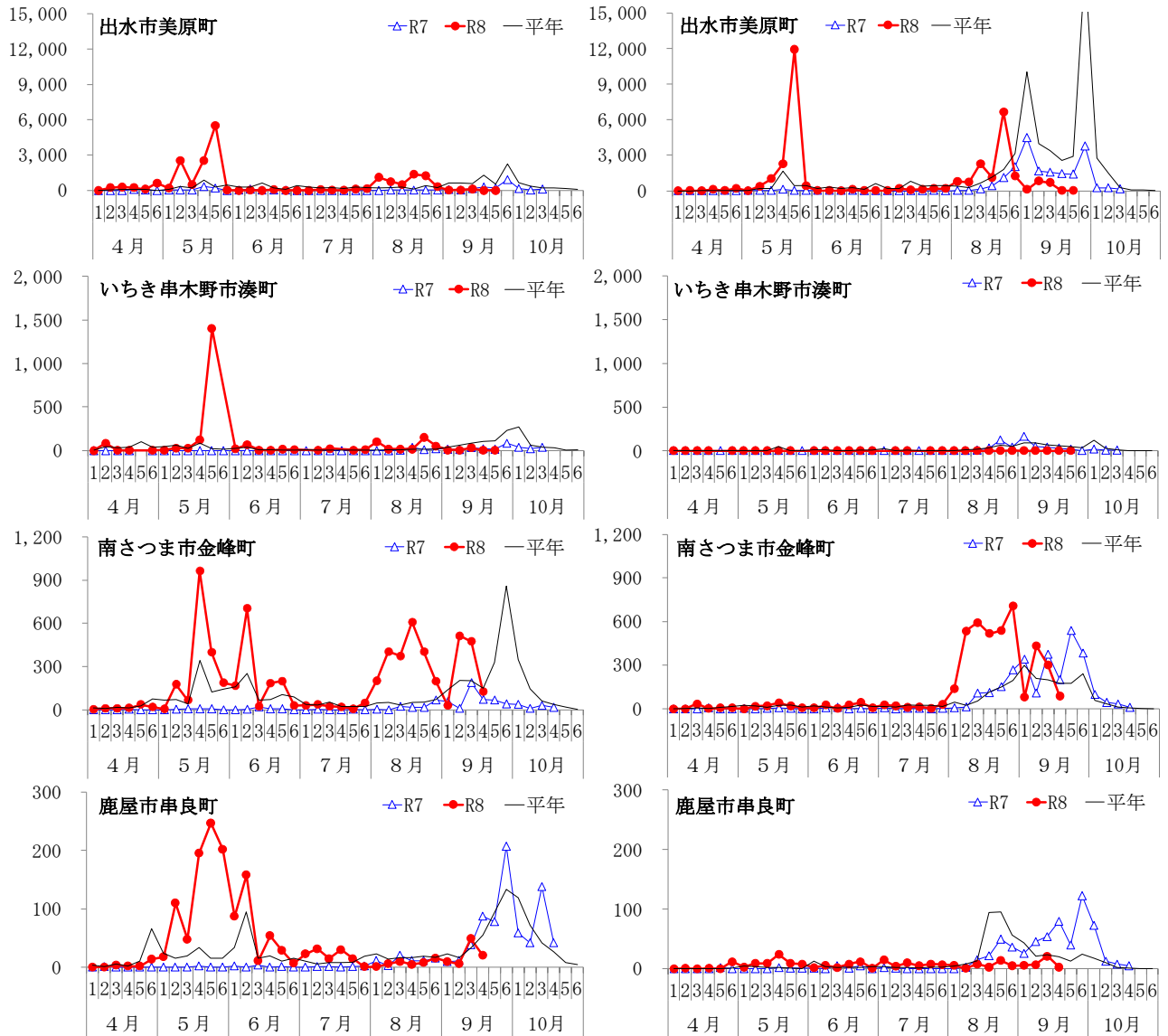


図1 予察灯における果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

注1) 平年は2016年～2025年の10年間の平均値

注2) 捕虫方法は南さつま市金峰町 100w 水銀灯、鹿屋市は捕虫用蛍光灯と白色蛍光灯 (20W) を併設、他は 40W 捕虫灯

表1 ヒノキ球果の口針鞘数 (カメムシ類の吸汁痕数)

(単位: 本/果)

調査地点	地点数	9月前期		9月後期	
		平均口針鞘数	最大口針鞘数	平均口針鞘数	最大口針鞘数
南さつま市	1	10.4	28	12.7	18
いちき串木野市	1	17.3	26	21.2	35
阿久根市	1	14.2	28	17.6	36
出木市	1	16.1	30	18.5	32
さつま町	1	16.0	30	19.7	37
本年平均	5	14.8	—	17.9	—
前年平均	10	15.0	—	16.4	—
平年平均	8	16.7	—	21.2	—

注1) 平年は2016年～2025年の10年間の平均。

注2) カメムシがヒノキ球果から離脱する目安は口針鞘数 25 本/果

注3) 調査球果数: 20 個/地点

防除に関する今月の留意事項

1. 果樹共通

(1) 果実吸蛾類

果実吸蛾類は、果実を吸汁・加害し腐敗・落果させる。夜間に活動し、果皮の薄いカンキツに集まりやすい。

ア 幼虫の食草（アケビ、ムベ、アオツヅラフジ等）除去や夜間に成虫捕殺、防蛾網（7.5～10mm目）を設置する。

イ 恒久的な対策として、黄色忌避灯を主体とした集団点灯を行う。

VI. 茶 樹

1. チャ

(1) カンザワハダニ

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 多

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：多

発生ほ場率 51%（平年 30%）：高い

寄生葉率 3.2%（平年 1.6%）：高い

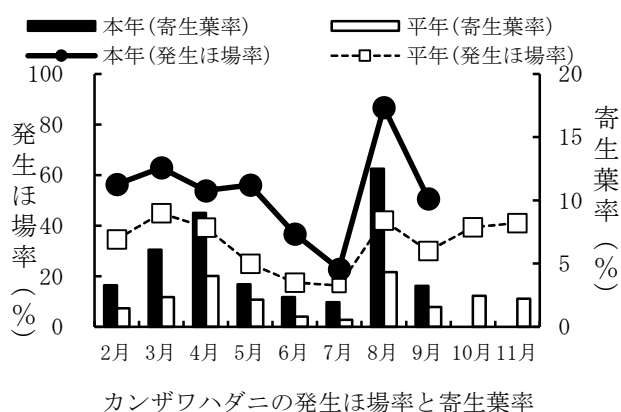
ウ 防除上注意すべき事項

（ア）越冬前の密度は翌春の発生量に大きく

影響する。発生の多い園では秋整枝直後と11月中旬～下旬に防除を行う。

（イ）天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない農薬を使用する。

（ウ）農薬は、葉裏まで十分付着するように散布する。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。